

# 月刊 エトランセ

第6刊 2014.06/23 発行

【連載】

クロノクロス・クロニクル

第三幕

修平 / イラスト Dake

【読切】

あおはる  
青春パラドクス  
市川正晶

【連載】

カラカラ 第三話 前編

霜山モリス  
イラスト めーぶる

「あなたが黒野黒須であるという保証が欲しいんです」

【巻頭】

花澤香菜ライブレポート

Live2014"25" 東京公演 @ NHK ホール

【取材】

ミュージカル研究会  
公演「地獄道中膝栗毛」



舞台裏を覗いてみた企画



## 巻頭カラー

---

C.C.C (クロノ・クロス・クロニクル) 第三幕

修平 / イラスト Dake



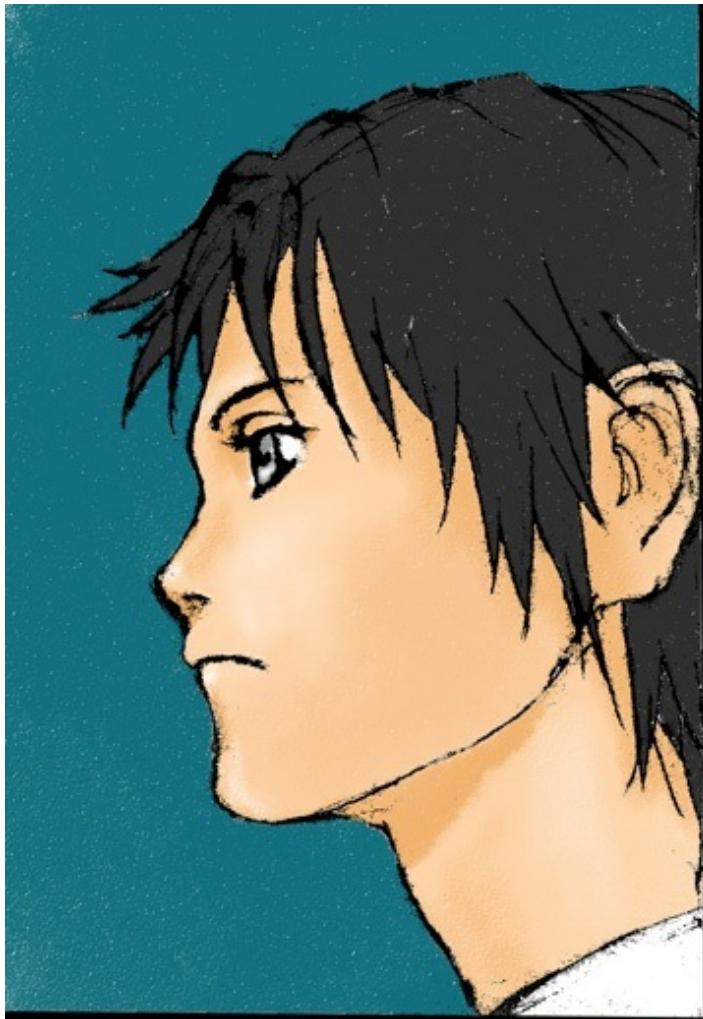
カラカラ 第三話前編

霜山モリス / イラスト めーぶる



【短編】 あおはる 青春 パラドクス

作・イラスト 市川正晶







## Live Report 2014/4/25(金) @ NHK ホール 花澤香菜 Live2014"25" 東京公演

昨年行われた 1stLive"claire" からちょうど1年。

豪華クリエイター陣を迎え入れ制作した 2ndAlbum"25" を引っさげたライブツアーの東京公演。アーティスト「花澤香菜」の持つ、幻想的でどこか懐かしいメロディーはオーディエンスを熱狂させ、時には感動をもたらした。彼女の夢の中に飛び込んだような独創的な世界観をレポートする。

### “声優 花澤香菜”と“アーティスト 花澤香菜”

皆さんは“声優 花澤香菜”を知っているだろうか？

物語シリーズの「千石撫子」や俺の妹がこんなに可愛いわけがないの「黒猫」、Angel Beatsの「奏」などたくさんの人気キャラクターを演じる人気美人声優だ。ここ数年は花澤香菜の声を聞かない日はないというほどの仕事量で、人気作品のキャスト欄には高確率で彼女の名前が綴られている。

彼女は2012年、アニプレックスからアーティストデビュー。

春夏秋冬それぞれの季節をフューチャーしたシングルリリースを発表した“花澤香菜ソロデビュープロジェクト”はサウンドプロデューサーに北川勝利、中塚武、神前暁らを招き作られた楽曲は90年代のジャズミュージックを匂わせ、アニメファン声優ファン以外の音楽ファンをも魅了し、新たに“アーティスト 花澤香菜”のスタイルを確立させた。

そして2014年、自身の25歳の誕生日である2月26日に25曲入りの2ndアルバム、“25”をリリースし、こちらもたくさんの音楽ファンを虜にする一枚となった。

### “アーティスト 花澤香菜”の世界観が盛り込まれた独創的ステージ

開演時間になると、ステージに降りていた幕に古びた時計の映像が浮かびだす。その時計の動きに合わせて流れ出すのはアルバム“25”の一曲目でもある「バースデイ」。幕には椅子に座り歌を奏でる花澤香菜の陰が映し出された。

約1分の短い楽曲の演奏が終わり、幕が上昇し、香菜さんとバックバンドの姿が聴衆の前に晒されると、会場中に大歓声が巻き起こる。その大歓声に呼応するようにバンドはアルバムの中でも比較的アップテンポな楽曲“25 Hours a Day”“恋する惑星”の2曲を続けて演奏し、早くも会場内の熱は最

高潮に達した。

彼女の優しい歌声やステージパフォーマンスともうひとつ注目すべきなのは楽曲の間に挟まれる柔らかいMCコーナーだ。

ライブの雰囲気崩さない、落ち着いていてのんびりとした「ゆるふわ」なMCは楽曲に合わせて体を動かし、声を張り上げることでたまった疲れを癒してくれる。

ステージは西洋風の街がイメージされていて、正面のスクリーンには楽曲のイメージに合わせてたくさんの情景が代わる代わる映し出される。赤い花柄のドレス風の衣装を身にまとい、頭には花のカチューシャをつけて街中を楽しそうに練り歩く香菜さんの姿はまるで内緒の休日を楽しむ異国の王女のような雰囲気を感じ出していた。

### Pick up Performance

ここでは披露した楽曲の中でも特に特出して素晴らしかったパフォーマンスをピックアップして紹介する。

#### ☆恋する惑星

今回のアルバム“25”に収録された楽曲の中で最も「アガル曲」それを3曲目でいきなり披露。一曲目に「バースデイ」が披露されたことから、やはりバラードの流れなのかな？と思わせておいてのこの曲の演奏。オーディエンスのテンションは跳ね上がり、この日一番の盛り上がり導いたパフォーマンスだった。

#### ☆ YESTERDAY BOYFRIEND

盛り上がる楽曲が続いてから、ゆるやかなMCをはさみ披露されたこの楽曲。センタースクリーンには青空や異国の町並みなど様々な情景が映る。これまでは演出を眺める暇がないほど盛り上がっていたのでバラード調のこの曲でステージ演出はより際立った。その演出は彼女の観客を包み込むような柔らかな歌声と温かいバックサウンドと共に観客を花澤香菜ワールドへと迷い込ませた。

#### ☆ last contrast ~ Good Conversation

アンコール前後の2曲。その曲調は切ないバラード。香菜さんの歌声と切ないメロディーの絡み合いによって奏でられるハーモニーは聞く者に静かな感動をもたらす。こま

で多数の演出があったが、この2曲は演出が少なめで純粋に彼女の歌声と楽曲の透明感で聴衆をもてなした。

一般的なアニソンアーティストのライブは最後に盛り上がる曲を一曲歌い公演を締め、というセットリストが多いが、アルバムの中でも壮大な曲調のバラードで公演を締めくくるという部分にも「アーティスト 花澤香菜」を感じさせられた。

## まとめ「花澤香菜という音楽性」

声優がアイドル化し始めてから長い年月が経ち、様々な種類のアイドル声優が誕生している今日。花澤香菜は少し時代遅れなサウンドを取り入れた独自の音楽性で、音楽業界に飛び込んだ。

声優としては現代のトップを行く存在ながらも、アーティストとしては周りとはほんの少し違う路線でファンを獲得し、「声優アーティスト」としての地位を築いたのだ。

彼女のヒットを受けて今後もこのような独自の音楽性をもった声優アーティストがたくさん登場するであろう。このレポートを見た声優に興味のある読者の方は、今後業界に出てくるだろうたくさんの「個性」の中から「これだ!」と思える音楽性を持った「個性」をどうか見つけてもらいたい。

最後に、今回のライブで後ろの席に座っていた外国人オタクがライブ終了後にハイテンションで叫んでいた一言を私も声高らかに叫ぼう。

「ヲタ芸は日本のカポエイラなのデスね!!!」

\*撮影禁止のため、会場内の写真は撮れませんでした。

## 花澤ワールド全開な魅力的物販

皆さんはライブイベントの物販を訪れたことがあるだろうか?そこにあるのは大抵の場合、演者がデザインに参加するなどの工夫が加えられたTシャツやタオルが置かれている。我ら消費者もその現状に特に不満は覚え、満足感に満たされながらそのタオルやTシャツを購入する。しかし、花澤香菜の独創的な世界は会場に入る前の物販スペースでもその片鱗を見せていた。

物販の一覧を見ると、そこには小洒落たTシャツやタオルに加え、「かなまくら」や「カナーディガン」、こんべいどうやレトルトカレー、クッキーなどの食べ物類など多方面に力

をいれた物販商品がたくさん並んでいる。今回はその中でこちらの2つの商品にスポットライトを当てて紹介をする。

### ☆かなチャーム

月刊ニュータイプで連載中の「かながり」に登場する「かなちゃん」のメタルチャーム。いわゆる香菜さんのSDキャラクターであり、昨年のライブツアーでも販売されていた。とても可愛い出来となっていて花澤さんのファンならぜひとも持ち歩きたいグッズであろう。



↑ 私は最左の眼鏡香菜さんが好みである。とても可愛いらしい。

### ☆香菜札

皆さんご存知、歴史的カードゲーム(?)花札のバロディグッズ。勿論花札としてプレイ可能、こちらも花澤さんファンならUNOやトランプの代わりに常に常備しておきたいグッズであろう。絵柄は香菜さん本人がデザインした「かな〜いあんファミリーズ」のキャラクターが印刷された可愛い出来となっている。



↑ 私のお気に入り札は「もふもふ」である。なぜかとても、なにかをもふもふしたくなる札だ。もふもふ。

取材・文/余村和哉

イラスト/ときこ

誌面編集/大久保佳澄





キャラ紹介だよ

くろびつ すがき  
【黒檀 菅木】



画家を目指す少年。  
才能の限界を感じて苦悩している。

くじゅうり きざみ  
【九十里 刻】



菅木の親友。  
彫刻の天才。

門番はすぐに鉄扉をしめた。

「とうとうお前も俺たちの仲間入りか」

腰をかがめなければいけないような狭い通路を、二人で歩きながら、門番は言った。冗談めかしてはいるが、本気のようにも見える。

天井からぶら下がるガス灯の周りを、黄土色の蛾が旋回していた。羽根に引火した蛾は全身を燃やし、花火のように光って消えた。

「せっかくだけど、それは、また今度にしておくよ」

菅木は幼い頃、暦に連れられて地下に降りたことがあった。モルヒネを買うためだ。母は病魔に犯され、通常の鎮痛剤は効かなくなっていた。

しかし、モルヒネはどこにも売っていなかった。モルヒネは全て、ヘロインに変換されており、鎮痛剤としての作用を失っていた。そのとき、菅木は地下にいる薬漬け芸術家のことを心底軽蔑した。

でも、今や彼らの気持ちも、すこし分かるようになっていた。それが、なんとなく彼をさみしい気持ちにさせた。

「今日は、人を探しにきたんだ」

「ほお。家族か？ 友人か？ どちらにせよ。地下に堕ちた芸術家が上で暮らすのは難しいぞ。心根から腐敗したやつらの集まりだからな」

自分をふくめて、と彼は苦笑する。

「芸術家じゃない。黒野黒須、って人」

菅木の言葉に門番は振り返り、真意を探るように彼を見つめた。

「引き渡すつもりか」

「そんなことはしない。聞きたいことがあるんだ」

黒野しか知らない、暦の行方。

「当てはあるのか」

「地道に聞き込みするよ。幸い、彼と俺しか知らないコードがあるから」

「芸術家に聞くのは構わない。狂っちゃいるが楽しい連中さ。でも、それを食いものにする奴らには、気を付けろよ」

門番は訝しげに言う。

「食いものにする？」

「そう。奴らにとって地下は人さらい天国さ」

昇降機の柵越しに、門番は言った。

地下倉庫は法の外にある。身に危険がせまっても、誰も助けてはくれない。菅木が闇に溶けてって、誰も気づかない。

「助言ありがとう」

菅木は微笑する。自分は薬をやっていない。体力だって人並み以上にある。いくら危険と言われても、他人事にしか聞こえなかった。

門番が「→」のボタンを押す。エンジンが奮える音がして、昇降機が下降をはじめた。

菅木は昇降機の中から地下倉庫を眺望した。全てが薄ぼんやりした光に照らされて、全容はうかがい知れない。

濃霧によって建物は覆われ、地下は外より、ずっと寒かった。昇降機は乳色の霧に飛び込み停まった。菅木は柵を開けることを躊躇う。十ヤード先だって見えない。今にも出刃包丁をもった殺人鬼が、飛び出してきそうな気配があった。

「父さんと一緒に来たときは、こんなに霧がひどかったっけ」

菅木は思い出す。たしかにあのときも、霧はひどかった。門番に散々脅かされ、でも菅木はぜんぜん怖くなかった。――母の死の方が、彼にはずっと怖かった。

そのときは、まさか、母どころか父まで立て続けに失うとは、思っていなかった。

菅木が降りると、昇降機は再び奮え、天井に昇っていった。それが霧に呑み込まれ見えなくなるまで、菅木はその場に立ち尽くしていた。

人の声がする方へ行こう、昇降機の音が止んだあと、彼は決意して歩きだした。

コンクリで打ち建てられたビルが複雑にからみあって、ビルは大蛇のうねりのようになっていた。まっすぐ歩いているはずなのに、いつの間にか真ん中から逸れている。

「この壁、なんとかならないのかな」

サイケデリックな壁画が、一本道を歪ませていた。薬は悪い達し方をすると、両目が万華鏡になってしまうと聞いたことがある。菅木が絵に覚えた生理的嫌悪は、すなわち、薬への嫌悪とも言えた。

回廊を抜けると、フロアがまるまるぶち抜かれた、だだ広い空間に出た。あちこちで人が寝ていて、生きているのか死んでいるのか人形なのかも分からない。

入り口近くの壁に寄り掛かる老人は、静脈に注射器を刺したまま失神していた。腕関節には無数の注射痕があり、四肢の肌は思ったよりも瑞々しい。近づいて見ると老人だと思っていたその人は、おそらく菅木と同じくらいの年齢で、そして、女性だった。

彼はビルを歩きまわり、手当たり次第に聞きこみをすることにした。

鑿を打ちつける男の、肩をたたく。彼はけむたそうに振りかえる。

「あの、スターチャイルドって知っていますか？」

「話しかけるな！ 邪念がはいる！ 邪念が！」

男は絶叫すると、自分の作業に戻った。

「そんなことよりも坊や、スゴイ薬があるんだよ。下がピンピンになっちゃう薬でさ」

「あなたカッコイイわねえ。一晩これっぽっちでいいわよ？」

「ああボク知ってるよ」

「肝臓売らない？ 痛くないからさ。あつという間だよあつという間。お兄さんも金にこまってるんでしょう？」

「憲兵隊の連中に報復する機会を見計らい、あいつらに泡を食わせてやるのだ」

地下に住む芸術家は、皆こんな具合だった。

肩を落として別のフロアにいこうとする。

「ねえボク知ってるってば！」

菅木につきまとう子供は、金色の髪はふけや汗や油で銅色に変色し、両手両足は泥やオイルで栗色にそまっていた。子供まで薬漬けとは、芸術家と薬物は切っても切り離せないものなのか。

「うちの近くに住んでるよ」

「悪いけど、君の冗談につきあってる暇はない」

「黒野黒須を探してんだろう。本当なんだってば。嘘じゃないよ。神様にちかってもいい」

神はここにいるぞ！ 壁に鑿をあてている男がほえた。当然、そこに神はいない。

文脈から読み取ったのかは分からないが、スターチャイルドと聞いて黒野黒須を連想したのは、この子が初めてだった。菅木は少年の目を見る。正気そうだ。ヘロインをやっている芸術家は、みんな目の血管が浮き彫りになっている。

「本当か？」

「スパイをやってたんだけどヤバイ情報を握っちゃって、ここにかくれたんだ」

門番の言葉が気にかかっていたが、同時に、黒野に会う千載一遇のチャンスではないかとも思った。少なくとも、少年の腕力に屈することはない。殺される、ということはなさそうだ。ならば、行けるところまでこの話にのるべきだ。

「じゃあ今から会える？」

鎌をかけるように言うと、少年は「これだけくれたらね」と即答した。

少年は数字が書かれたクシャクシャの紙を彼に渡した。

「高いな……」

貧乏芸術家である彼の所持金をやや上回る数字だった。少年の魂胆を見た気がしたが、本当に知っているのだとしたら、これくらいのマージンでも安いくらいだ。

菅木はじっとがま口を見つめた。新しい筆、新しいカンバス、新しい絵の具、新しい鉛筆。欲しい物が頭に浮かんでは消えた。だが、何を差し置いても、菅木は暦に会いたかった。

菅木は少年にがま口ごと渡す。

少年は、中に入っていた紙幣と硬貨を見て眉をひそめた。



「これで足りてるのかい？」

「いや、ちょっと足りない。だから、このベルトで勘弁してくれないか？」

「ヤダ。上着と、それに帽子も」

「帽子は……。渡せない」

「だ一め。会いたいんでしょ？」

もう降参するしかない。彼は渋々帽子をはずす。黒髪がゆれた。

「黒檀みたいな髪。洗ってないの？」

菅木の髪をひっぱったりなでたりしながら言った。

帽子をかぶって髪をかくさなければ、店には入れないこともあった。

「生まれつきこうなんだよ」

「変なの」

「よく言われる」

少年の目に嫌悪はない。菅木は安堵していた。この髪のせいで、いつも苦勞を被ってきたから。――最初から臆せずふれてくれたのは、刻と、この子だけだ。

「君、数字が分からないの？」

「だからって嘘ついたらコロスからな」

少年は衣服をいそいそとまとった。やせ細り、身長も低い彼が着ると、全身をすっぽり覆った。ベルトをまきつけようとして四苦八苦している彼に、菅木は丁寧につけ方を教える。

刻と会ったばかりのころを思いだした。刻もまた、右も左もわからぬ状態でこの街にやってきた。彼は行き場のない彼女を、一年もの間家にかくまった。今となっては妙な話だ。一年間、彼は刻が異性ということに気がつかなかった。よもや、女性がこの髪に触れようとは、誰も思うまい。

意せず笑みがあふれる。

刻はあの頃から変わらない。

変わったのは、自分だけだった。

「君、名前はなんていうんだ？」

「なんでそんなこと聞くの？ どうだっていいじゃん、名前なんて」

「だめだよ。名前は大切な物なんだ。お父さんやお母さんから貰う、大切な……」

「ふーん。ゴミって呼ばれてる」

「それは名前じゃないだろう」

「じゃあお兄さんが勝手に決めてよ。とにかくボクには名前なんて必要ないんだ。ボクはボクなんだから」

名がないのならば、仮の名前をつけて呼ぶしかない。名前というのは適当に決められるほど、軽いものではない。彼はしばし考えこんでしまった。

「そんな真剣に考えなくてもいいじゃん」

「駄目だよ。『字は体を表す』。俺は自分の作品のタイトルを決めるのにだって一ヶ月以上も……。いや、なんでもない」

頭の中に溢れる、過去作品のタイトルの数々。いくら忘れたいと願っても、それは床におちた油絵具、埋もれはせよ消えることはない。

「兄ちゃん、帽子はかぶってなよ」

「え？」

「ハゲ隠してんだろ」

「違うよ！？ それは誤解だ！」

少年はクスクス笑う。

「からかっただけさ。とっても似合ってるから、つけときなよ」

そう言って照れくさそうに前へむきなおった。

少年に導かれるまま菅木は歩いた。寝ている人をまたぎ超え、建物と建物のすきまに架けられる細い板をわたり、絵筆が無数にぶら下がる回廊をぬけ、戦場跡のようにマネキンが転がる広場をとおり、ちょっと太っていたらとおれないような穴にも潜った。そして最後にたどりついたのは、色のあせた人参や、紫の唐辛子がぶらさがる、ちいさな診療所だった。

「ここに黒野黒須さんがいるんだよ」

「怪我、してるってこと？」

「医者なんだ」

彼は木の扉をたたく。

「先生！」

インクによってよごれた白衣、レンズにひびがはいった丸めがね、ニコっと笑うとすきっ歯が見える。身体からはホルマリンの臭いがただよっている。壮年の男性が、診療所から出てきた。

「お客さんだよ。黒野先生。先生に会いたってさまよってたんだ」

「ほおほお。よく連れてきたね。ゴミ」

「だからさ、さ、早くこれだけおくれよ」

黒野は、少年の手から紙をうけとった。

「まだこんなものを持ってたのか」

「そりゃあそうさ。これだけ、十回ももらえたら、ボクは上にいくのさ。そんで、いろいろなものを観てまわるんだ」

「なにをばかなことを」

男はポケットの中に入っていた最小硬貨を一枚、彼に投げてよこした。しかし、ついさっき菅木から金をうけとっている少年は、すぐにそれが嘘であることを見抜いた。

「これだけくれるっていったろ！」

少年は硬貨を地面にたたきつける。

「こんなに沢山、あげられるわけがないだろう」

「でもこのお兄ちゃんはくれたよ！ 服だって！」

黒野は少年のことを「わかったわかった」と冷たくあしらい、それじゃあ二人とも入りなさいと言って背をむけた。

菅木は中に入っていいものか、迷った。そもそも、この男はほんとうに黒野黒須なのだろうか。黒野と最初に出逢ったときの印象を思い出そうとするが、黒野は彼にとって、黒衣をまとった何者かではなかった。

診療所には黒革の診察台が二つおかれていて、奥にスツールとひじかけ付きの椅子があった。黒野はスツールに座ったので、菅木は残っている方に座った。ひよこひよこついてきた少年は一斗缶の上に腰をおろす。

「それで、私になんの用かね？」

菅木は、いきなり本題に入る気にはなれなかった。本当に黒野だったならば、なんの用とは、訊かないのではないかと。彼に話したいことがあるから、菅木を求めて奔走していたのではないかと。

「黒野さん。その前に、いつも着ている黒衣を見せてくれませんか？」

男の目が途端に鋭くなった。怪しんでいることがバレたらしい。仕方ない。覚悟の上だ。

「なぜ」

「あなたが黒野黒須であるという、保証が欲しいんです」

「それはつまり、私のことを、疑っていると？」

男の声が反響する。菅木はすこし考えたあと、はいと言った。

「なかなか慎重な若者だ。でも、それくらい用心するに、越したことはない」

黒野は背後のカーテンをめくると、そこから大戦のときに使われていたと思われるガスマスクを持ってきて、自分が座っていた椅子の上に、どんとおいた。複眼のような目、たしかにそれは、黒野が使っていたものと同じ型のガスマスクだ。

スパイ稼業の話延々する黒野。菅木は途中、席を立ち、便所の場所を聞いた。

小便器の前に立つ。彼はフォルダーから鉛筆を取り出した。一回目、黒野を見たときのガスマスクを壁に描く。さらにその上から男がもってきたガスマスクの絵を、重ねて描いた。

二つのマスクの輪郭は、完全には一致しなかった。

「ああ、遅いと思って来てみたら」

菅木は、振り返る。

ナイフをもった男が、目前に迫っていた。

「く、黒野の爺ちゃんっ。なにやってんのさ！」

少年は菅木の手錠を外そうと、椅子に跳びかかるが、それを男の腕が許さない。彼を片腕で床

にほうり投げると、すかさず腹部に蹴りをいれた。続けて息が切れるまで狂ったように蹴りまくる。無言のうちにおこなわれ、あとには動かない少年だけが残った。

「お、おい！ 大丈夫か！？」

一泊遅れて、菅木は男に体当たりする。

菅木の頭突きにより、男はぶらさがったライトに顔をぶつけて無様に転ぶ。

菅木も両腕がふさがれて、受身がとれず、床に肩を打ちつけた。

「ごめん……ごめん……。ボクが、お金欲しくて、騙されたから」

「俺のことはいいから」

菅木は身体の向きをなんとか変えると、黒野の名をかたっていた男をにらむ。彼の手には錆びついたメスがにぎられており、倒れるときに巻きこまれたカーテンのむこうには、臓器がはいったポッドが所狭しとおかれていた。

危険だということは百も承知だったが、どこか、他人事だという思いがあった。

事実を、まだ受けとめられない。

「私はなあ、何人もの芸術家を、こうやって解体してきたんだ。都の者はよく肥えておる」

「な、なんでそんなこと——」

「売れるからに決まっているだろう。毒にも薬にもならぬ三流芸術家を、世のため人のためにつかってやるのだ。感謝せい。大丈夫、臓器に貴賤なし、というのが私のポリシーだ。だから君の内蔵も、綺麗に、奇跡みたいにスパッと抜き摘ってあげるよ。さあまずはどこがいい？ 悪いが麻酔はないんだ。さっさと心臓を摘ることをオススメするが」

菅木は未だ現実を受け入れられず、咄嗟に「爪を切ってもらって帰るってできませんか……？」と答えた。

「指がいいのか？ 珍しいな」

彼は菅木を椅子に縛り付け、背もたれを引っぱって奥の部屋へ彼をひきずった。菅木のかかどが地面をこする。見てみれば、床には靴の底が摩擦によって溶け張り付いた痕が沢山できていた。

廊下の奥には赤黒く変色した鉄扉があり、男は椅子から手をはなすと、両手をつかって開ける。

「くそ、最近、重くなったな」

彼がつぶやいたのを好機と、菅木はもがいて大きくころんだ。

転がって逃れようとするも、あっという間に男にとりおさえられた。

「鼻が折れたらどうするんだ？ これも売れるんだぞ」

鼻血をだす菅木を見て険しい表情をする。

だが、菅木の真の目的は拘束を解くことになかった。ペンフォルダーに残っていた最後の鉛筆を、手でにぎることにあったのだ。

ひじかけを、一筋の水がつたうように、鉛筆の黒炭がおりていく。それは椅子の座面をつたい、支柱をくだり、車輪を横断した。地面に達すると、線は廊下の直線をひた走る。黒い線は助けを求めて診療所の外にむかう。誰か一人でもこの異常に気づいて欲しい。

菅木は、鉛筆の黒檀を全て使い切ってから、それが無駄な抵抗であったことに気が付いた。彼は錯乱していた。

「じゃあまずは指だ。お望みどおり、指をおとそう」

鉄扉を閉めることをあきらめた老人が、彼にむきなおった。

メスを医療靴からとりだすと、アルコールを吹きかけた。刃を菅木の中指、根本にあてる。絵かき独特の指、筆があたる中指の皮膚が、他とくらべ厚くなっている。

「お前さんは画家になりたかったのか？ この街には、お前の代わりがいくらでもいる。画家なんて飽和してんのさ。安心して指とおさらばするんだな」

代わり。

彼は、今まで描いた絵のことを思い出した。なに一つ納得ができなかった。なにを描いても釈然としなくて、次の瞬間には破り捨ててしまいたくなった。描けば描くほど自分が惨めにおもえて、視界から遠ざけるように、投稿していった。

いっそ、絵なんて描けなくなってしまう方がいい。何度思っただろう。しかし、いざそれを現実のものとしてみると、自分がなんて馬鹿な願いをしていたのか、嫌というほど思い知らされる。

こんなにも惨いこと、自分は本気で望んでいたのか。

「……代わりなんて、いない」

「落選」の二文字で捨てられる物が自分にとって傑作だなんて、認めたくなかった。

あの時、あの芸術家気取りが絵を笑ったとき、自分は絶対に笑ってはいけなかった。自分まで、己の絵を見捨ててはいけなかったのだ。

「俺は、俺の絵が好きだ。だから、代わりなんていない。俺の絵は、『俺』しか描けない」











市川

あお  
はる

青春パトックス

正  
晶

キャラ紹介だよ

えんかわまこと  
【燕川 真】



辻堂、假屋崎の親友。  
二人とは中学以来の仲。

つじどう  
【辻堂 あかり】



燕川の同級生。  
控えめで和を尊重する女子。

かりやざきしょう  
【假屋崎翔】



燕川の同級生。  
見た目は怖い友達思い。

たしの なつき  
【多枝野奈槻】



假屋崎に恋する関西弁の美少女。

最近、<sup>かりやざき</sup>假屋崎の傍に変な女が付き纏っている。

現に今目の前でソイツは假屋崎の首に手を回し、丸ごと身を委ねるようにピタリと密着している。満足そうに目を伏せ、ほのかに頬を紅潮させている表情で如何にも假屋崎と二人だけの世界を築き上げようとしている。全くもって図々しいことこの上ない。

<sup>たしの なつき</sup>多枝野奈槻。俺達と同じ高校一年。耳と同じ高さからツインテールで結ばれたその栗色の髪は、肩にやや広がるように覆い被さっており、黒い瞳は大きくて<sup>つぶ</sup>円らだった。身長も胸もウエストも至って平均的で、これといって秀でてはいなかったが、総じて上から下までバランスは整っており、顔の可愛さが上手く引き立っている。悔しいけれども、容姿自体は美少女と認めざるを得なかった。

彼女がもたらした日常の崩壊。いや、塗り替えと言ったほうが良いのかもしれない。どちらにせよ彼女が引き起こした波紋が、俺達三人にとって不調和を生み出すことに変わりはない。GWが明けた初日に朝の通学路で假屋崎がアイツを連れて現れたのを見た時、思わず俺と<sup>つじどう</sup>辻堂は目を丸くした。その時点で多枝野は彼の引付き虫と化していたのである。

三日後の今日も、例によって二人は嫌味にも仲睦まじく学校へと歩を進ませているわけだが、相も変わらず公衆の面前で無遠慮かつ破廉恥な光景を繰り広げている。後ろから見ている俺からしてみれば物凄く気まずい状況であることこの上ない。辻堂も恐らくそう感じているに違いない。よくもまあ後から割り込んでおいて傍若無人な振る舞いを見せつけてくれる。

いよいよ堪忍袋の緒が切れ、「なあ、いい加減にしてくれ」とまくし立ててみるが、假屋崎自身も困った面持ちで此方に振り向き、

「いや、努力はしたんだが」

と、多少力任せに彼女を一旦引き離してはみたものの、

「これだよ」

彼を磁石とでも思っているのか、さも吸い付くようにまた密着する。

「おい多枝野……」

「嫌や。仮にそっちが離れたところで、ウチから逃れられると思ってるん？」

三日月を下に落としたような細い目つきを向けながら、多枝野は甘い声で語りかける。「それにウチがアプローチかけた時、こちらさんはそんなに拒む様子もあらへんかったけどなあ？」

ずい、とさらに接近して彼を追い込む多枝野。

「みんな初めはちょっちギクシャクしてるもんよ。それに比べればウチらなんてええカップルやないの。なあ、あかりさんもそう思わへん？」

すると俺の隣にいた辻堂は二人を見ながら屈託の無い笑顔で頷く。

「うん。良いんじゃないかな。仲が良くて」

その言葉を聞いた途端、俺は厳しい視線を假屋崎に向けざるを得なかった。

多枝野の行動もそうだが、何より一番気に食わないのは完全に拒むことなく彼女を受け入れている假屋崎自身だ。それがどうにも、俺に差し向けられた一種の裏切りに思えてならなかった。

だが俺の怒りの核は彼の裏切りにだけ作用しているのではない。もっと別の、何かを憐れむがゆえに込み上げてくる反動としてのそれは、何処となく空しい悔しさにも似ている気がした。

不可解だ。假屋崎の心中を知っている俺だからこそ、彼のその態度が尚更理解し難い。一体どうしちゃったんだ？ 今の自分がおかしいとは思わないのか？

そうだろ？ だってお前は……、

いてもたってもいられなくなった俺は、言葉を残すことなく駆け足でその場から離れる。背後から呼び止められる声を見せず、ひたすらに足を早め、学校へと急いだ。

なあ假屋崎。本当にそれでいいのか？

[一]

四時限目が終了すると、昼食の為に生徒の出入りでC組内はごった返していた。室内、はたまた校舎外など、今日も生徒が自分の落ち着く場所に各々散らばって食事を取ろうと足を運んでいる中、さて我も食堂に赴かんといつものように席を立とうとして、ふとあることに気づき、重い動作で再度席に腰を下ろした。そう、多枝野奈槻の件である。

多枝野と会ってまだ数日しか経っていないが、正直そろそろ彼女と絡むことは御免被りたいと考えるようになってきていた。前に一度だけ多枝野を含めた四人で食事を取ったことがあったが、彼女を假屋崎の隣席にしてしまったがために、嫌でも彼らの疑似的夫婦交流を目に収めることになってしまった。「ほな、あーん」なんて、一体どこの新婚夫婦の真似事だろうか。流石にアイツも初日からそれを受け入れることはしなかったが、多枝野のことである、幾度にも渡る猛烈アタックでいずれは假屋崎自身のその許容範囲まで追い込むかもしれない。いや、その前にしびれを切らせて無理矢理ねじ込むという実力行使に移る可能性があるのもまた然り。

<sup>えんかわ</sup>  
「燕川君」

そんなふうに頭の中で灰色をした得体の知れないものが渦巻いていると、二つ前の席にいた辻堂がショートヘアを浅くたなびかせてこちらにやってきた。

「あのさ、今日のお昼のことなんだけど……」

と言いかけた辻堂の遙か後方、つまり廊下を行き来する人達の中を、偶然にも多枝野に連行されていく假屋崎が通り過ぎていくのが一瞬目に入った。恐らくA組の授業が終了してすぐに彼女が彼を拉致したのであろう。それにしても凄い速さだ。

「あいつらとは食わん」

彼女が言い終わらないうちに俺は堅い答えを先に返し、机に視線を落とした。

「え、そんなあ。みんなで食べようよ」

「俺はいい」

「ど、どうして？」

「今のあいつらとは一緒にいられる気がしない」

「そんな、まあ確かに少しくつつき過ぎだとは思うけど……でも、きっとすぐに慣れると思うよ」

」

慣れる。出来ればその言葉を辻堂の口から聞きたくは無かった。件の事情に関して無知であるが故に、また平和や安穩を好む彼女の止めどない優しさ故に仕方の無いことなのかもしれない。しかし今は、その花が咲くような温かな慈愛がかえって俺の胸を抉り、残酷な心持ちにさせてしまうのだ。

「……購買行ってくる」

「あっ」

席を立ちあがる俺にせめて何か他に言い伝えようと、辻堂が言葉に迷っているのが窺える。

「とりあえず今日はパスだ」

「で、でも……」

「お前は勝手にすれば良いだろ」

「えと……………うん」

思った通り残念そうな表情を浮かべる彼女を横目に、俺は財布を持って廊下に出た。これで辻堂は俺抜きで食堂に向かうことになるだろう。少なくともこの現状を整理するために、せめて昼くらいは一人になりかった。

「……何で居る」

購買でパンとおにぎりを買って教室に戻ってくると、驚いたことに辻堂は俺の席の前の椅子にまだちょこんと座っていた。

「え、だって、勝手にしろって言われたから……」

俺は自分の席に着き、彼女とやや顔を近づけて相對する。

「やっぱり気まずいとも思ったか？」

「……そういうわけじゃないけど」

俯き加減に小声で返してくる様子を見ると、ああ凶星なんだな、と心の中で軽く笑った。

[二]

あれから数日が経ち、フラストレーションと隣り合わせの生活がいよいよ板に付いてきた頃。

まさか災厄の方からわざわざ出向いてくるとは思わなかった。

放課後の下駄箱前。あの、多枝野奈槻が。あたかも通せんぼをするかの如く、廊下で圧倒的な存在感を醸し出しながら俺を待ち構えていたのだ。俺がこうして日中じりじりと燻っている元凶とも言うべき存在。気付いているようで実は全く気付いてないような、無闇に敵意を出せないその憎たらしい振る舞い。そのせいで下手に責め立てが出来なかったが、しかしこうも圧迫されては、こちらも長々と気力を保てないというものだ。そんなわけで俺は単調で無機質に、そしてやや苛立ちを混ぜ合わせて作った「何」という言葉を口から放ってやった。

「いや、一応翔の知り合いみたいやし、軽い挨拶くらいしとかなあかんかなって」

はあ、成程。俺達の輪に完全に入った前提で自分にこうして訪ねてきている、と。ふざけるな

。俺からすればお前は赤の他人と同義なんだ。おまけに無駄に律儀な所が却ってまた嫌気を増加させるんだよ。

「え、ちょっと」

くるりと反転し、無言で彼女に背を向けて立ち去ろうとする。

「なあって」

遠ざかりそうもない彼女の足音が自らを追ってきていることをはっきりと示していた。

「そんなにウチん事嫌い？」

「ああ嫌いだね。馴れ馴れしいし、おまけに鬱陶しい」

彼女なりに多少自覚はあったようだ。

「別に燕川には迷惑かけてへんけどなあ」

「アイツにベタベタしてるのが鬱陶しいって言ってるだろ」

「.....もしかして、翔のこと好きやったん？」

「ふざけんな」

「ほんなら何ねん」

遂に足を止め、俺は深く溜息を吐く。やはり言うべきだ、これは。背後から付いて来ていた彼女と向き合うと、人差し指を向けて切り出した。

「お前、アイツの気持ちを知ってて近づいてるのか？」

「気持ち？　ウチに対する？」

「違う、アイツ自身の、だ」

「？」

やはりこいつも気付いていなかったようだ。ふん、なら教えてやる。ここでアイツの気持ちを配慮する必要はない。彼女に嫌悪を抱えている今だからこそ、ありのままの事実を伝えてやる。

「いいか多枝野。あいつはな、辻堂のことが好きなんだよ」

数秒の沈黙。

「.....」

すると突然多枝野は上目遣いになり、口元をニヤニヤと卑しく綻ばせ始める。

「何や、ウチと翔ん仲を引き裂こうって魂胆か？」

来た。予想通りだ。しかしどうということはない。

「本当のことなんだから仕方ないだろ」

「いや、嘘や。もしそれが本当っちゅうんなら、何で今までウチのこと振らんかったん？」

「そんなの、俺が一番知りたいくらいだ。とにかくアイツは中学の頃からずっと辻堂のことが好きなんだよ。今まで散々アイツの相談に乗ってきたんだ、その意思是ホンモノだ。これは誓ってもいい。だから休日挟んだだけでひょいと心変わりするとは、到底思えない」

「.....んー、何だかなあ」

まだ納得がいかないようである。そりゃそうだ、彼女からしてみれば俺が二人の仲を引き裂く邪魔者だという事実は、つい今しがた確認したばかり。容易く信じられないのは当然の事。

しかし彼女に俺の話を信じさせるかどうかというのは、はっきり言ってどうでも良かった。た

だ「伝えた」という事実さえ残せばそれで良いじゃないか、とほぼ投げやりな気持ちで臨んでいた。

すると、急に多枝野は顎に手を当てて黙り込んだ。不敵に微笑んでいるわけでもなく、ただ真顔でやや俯き、何かに思考を巡らせているようにも見える。

意外だ。てっきり頑なに俺の言い分を叩き落とすかと予想していたのに、これでは少し肩透かしを喰らった気分である。それに、多枝野のことがますます分からなくなってきた。一体何なんだこいつは。今まで決めつけていた「多枝野奈槻」という人物像が、まるで意味を成さなくなってきた。てっきり脳内が桜花一色で満たされている単細胞生物だとでも思っていたのに。

いや待て。逆にこれなら説得が通じるかもしれない。元々それは假屋崎に行くつもりだったのだが、多枝野自身が身を引いてくれるのならば話が早いというものだ。もしかしたら案外話を聞いてくれるかもしれない。少なくとも、冷静に構えている今なら……

「なーんてな」

すると多枝野は何の前触れもなく月と太陽が入れ替わるように表情をコロッと一転させ、上半身をこちらに乗り出しつつ、あざとく唇に人差し指を添えた。

「悪いな、お察しの通りウチはアイツに御執心やねん。こちらもそう簡単に諦めるわけにはいかんのや。なんたって、翔はウチの運命の人やからな」

言い終えると彼女は両端のツインテールを大きく弾ませながら身を翻し、「じゃね」と手を軽く振って意地悪そうな笑みを浮かべながら、軽い足取りで廊下の向こうに消えていった。

「……は？」

状況的にも空間的にも置き去りにされた俺は、結局虚しいことにその一文字しか口にできなかった。

[三]

「Love , love me do……」

懐かしい歌詞を口ずさみながら、階段を上り、二階へと歩を進める。その階にはウチら一年の教室がずらりと並んだ。翔は理科室に忘れ物を取りに行くっちゅうことで、しばらく姿を見せてへん。他の知り合いは皆、部活もしくは家に帰てしもうて、誰もおらん。

暇持て余すんがこないに退屈で寂しいモンだったとはなあ。翔が傍におらんと、禁断症状でどうも身体がムズムズしてきよる。

「翔……」

アイツはウチの心を奪って行きよった。

ほんの些細な出来事やった。けど今も、そしてこれからも忘れるんは決して有り得へん思う。何気ない一瞬がどんだけ大切なモンかを思い知らされたことが、今までにあったやろうか。

事は四月の終わり、学校帰りの電車ン中んことやった。何気無く扉寄りかかってスマホを弄てると、ふと向かい斜めの座席の前に立っているアイツを見かけた。ギラリ目つき悪うて髪ボサボ



サなんが、いかにも近づけん雰囲気出しとるなあと思っとった。で、そんな時アイツは吊革に掴まりながら、前の席に座っていた女の人の抱えている赤ん坊に視線を落としてたんや。何するんかな、もしや赤ん坊泣かすんやないかと内心焦りながら見守っとった。

ほしたら翔んヤツ何したと思う？

いきなり鼻ア人差し指で押し上げて、豚の真似をしようたんや。何や赤ん坊を笑わせようとしてはったんやな。

そしたら、そしたらな。赤ん坊がポーッとした表情で、同じように人差し指で鼻上げてアイツの真似しようたんや。ブハッ！ それがめっちゃおもしろくておもしろくて、ウチ、車内に関わらず吹き出してしもた……………まあ、えらい恥ずかしかったけどな。

でもそんな時。突然ウチの身体ん中に、何か温こうて優しいものがブワーッと流れ込んできたんや。やけど、大してびっくりはせえへんかった。何でやろ、それは何の抵抗も無く当たり前にウチの心を満たしていった。もしや一種の魔法に掛かってしもたんかもしれへんな。ほんで十分に満たされた頃にはもう、アイツを好きィなってた。えらい可笑しな話やろ？

ウチ、今まで色んなやつと付き合ってたけども、ずっと相手ツちゅうモンを心からは信頼してへんかった。皆、見えへん闇ィ抱えとる。それに触れるんを知らず知らずの内に恐れとった。恐れとったけど、せやかて自分の退屈紛らわしてくれるんなら別に構へん思て、ずっと妥協しててん。触れないように、そことなく距離を取ってな。それ気付かれて相手から別れられるんがしょっちゅうで。本当は自分好きちゃうやろゆわれて、良く考えれば、ウチも信頼されてなかったんやなって。アハハ、当然か。せやって今まで長う続けへんかったん思う。

やけど、翔と赤ん坊の遣り取り見て、ああ、コイツやったら良いかもなって、そんな気持ち  
がほっこり芽生えたんや。心の鎖がゆっくり、音も立てずに解<sup>ほど</sup>けていった。もう怖くはあらへんかった。あんな目つきしとっても、それでも笑顔で近づける自信があった。

アイツがウチに見せてくれはったモンは、一見小さそうに見えてホンマはとてつもなくでっかい何かやったんやないかと思う。ヒトがヒトとして生きていくのに必要なモン、もし失ってしもたら、そらとても悲しいことなんやないかと思うぐらいに大切なモン。ヒトが互いに歩み寄るための、でっかいマテリアルみたいな。大げさ思うかもしれへんけど、ウチの心を大きく動かしたんが、何よりの確たる証拠に思えてならんのや。

何で好きになったんか強いて言うたら、アイツの純粹さに惚れた、ちゅうことかもしれんな。

翔はまだウチを受け入れてくれへん。どんなにウチのこと好きか聞いても、ずっと保留にしてきよる。

『なあ、そろそろええやろ？』

『……ごめん、まだ分からん』

何で。ただ、「好き」のその一言だけが欲しいのに。どしてゆってくれへんのや。

アンタを立ち止まらせとるモンは、一体なに。

答えて。答えて一な。せやないとウチ、どうにかなってまう。

やって好きやもん。めっちゃめっちゃ好きやもん。枕アありったけ抱きしめても、収まりきれんく

らいに『好き』がブワァー————で溢れて来よる。そんでめいっばい翔に抱きついても、アイツは振り向いてくれへん。これ以上、どう表現しろゆうねん。いくら翔の近くおに居っても、アイツの心はいつも半分だけどっかに行っとる。まるで、脆そうやから壊せる思ってた壁が全然崩れへんような、そないな感じに全く歯が立たん。

『あいつはな、辻堂のことが好きなんだよ』

ふと、あの言葉が甦る。

燕川を信じてええんか分からんけど、もしホンマにアイツがゆうように、翔があかりちゃんを好きやったとしたら。

そしたらウチは……。

ある教室の前で立ち止まる。開け放たれた後ろ扉から見える教室内、そこには一人の女の子が居った。

[四]

「ああ、今何つった!？」

「奈槻と付き合……っぐ！」

翔が言い終えるよりも早く、真のこぶし拳が彼の腹を直撃した。

数分前、理科室に入ろうとしていた翔を強制的に連れ出した真は、多枝野の件について体育館裏で説得を試みようとしていた。しかしあろうことか、場所に着いて開口一番、翔は「多枝野と付き合う」と言い出したのである。真は驚愕した弾みで彼に掴みかかり、感情任せに怒声を浴びせていた。

「どういうつもりだ！」

「……アイツの好意を、無駄にはできない」

胸倉を掴まれ、苦しそうに目蓋を閉じつつ翔は言葉を発する。

「ふざけんな、そんなことよりもまず考えることがあるだろ！」

「……あ？」

彼のわざと惚けたような態度に真は更に怒りが沸き、再び腹に拳を叩き込んだ。

「辻堂のことに決まってるだろうが！」

一瞬足の力が緩んで崩れ落ちようとした翔を、彼は無理矢理吊り上げるようにして起こす。

「なあ、おかしいと思わないのか？ 中学から溜めてきたアイツに対する気持ちを、どうして綺麗さっぱり忘れられるんだよ！ おい、お前本当に假屋崎か？」

「……」

「そうやって後から来た多枝野なんかにはホイホイ乗せられちまうのか！ 所詮その程度だったのかよ、お前の辻堂に対する気持ちは！」

相変わらず黙ったまま目を伏せている翔の態度が真自身の苛々を更に募らせ、口調がほぼ感情任せになってくる。

「中途半端な気持ちで好意を寄せられた辻堂のことを思ってみろよ……これじゃまるで、辻堂が

捨てられたみたいじゃねえか！」

その言葉で翔は反射的に目を大きく見開かせる。

「おい……捨てたとか、まるでアイツをモノみたいに言うのはやめろ！」

「現におまえがそう扱っているようにしか見えないんだよ！」

「違う！」

今まで無抵抗だった翔が初めて拳を突き出す。しかし真は即座に掴んでいた胸襟を放すと、<sup>かわ</sup>敢え無くバックステップで躲してしまった。着地した足元で数枚の緑葉がザッ、と舞う。

「はっ、違うもんか。ひょいと気移りしやがる浮かれ野郎が、よくそんなことを言えたもんだな、ええ？ 俺の気持ちすら軽く踏みにじりやがって、この分からずやが！」

ぴくり、と翔の眉が微かに動いた。

○

「あかりちゃん」

誰もいないC組で独り帰り支度をしていたあかりを、奈槻は然り<sup>さげ</sup>気無く廊下から呼び掛けた。

「あ、奈槻ちゃん。今帰り？ 假屋崎君は一緒じゃないの？」

「理科室に忘れ物したゆうて、しゃーなしに待たされとる。そっちは？」

「私はついさっき委員会の仕事が終わったところ」

「そうか」

教室に入ると彼女は自然な足取りであかりの机まで足を運ぶ。

「お外が少し曇ってきてるね。やっぱり傘持ってきてきて正解だったかなー」

「なあ、あかりちゃん」

「？」

外を天候から目を外し、頬笑みを浮かべながら奈槻に振り向くあかり。

「あかりちゃんは翔や燕川と仲ええよな。いつから知り合いやったん？」

「燕川君とは中学に入学してすぐだったかな。私と帰る方向が同じだったから、良く一緒に帰ってたの。假屋崎君も確か五月頃にはとっくに燕川君と仲良くなってたと思う」

「へえ。翔は前からあんな感じ？」

「ん……昔はちょっと性格が尖ってたけど、今じゃすっかり丸く落ち着いた感じかな」

「性格が尖ってたってどんな？ よくキレるとか？」

「う、うん。その、口調が暗めで、いつも怒っているように見えたから……」

奈槻のあからさまな詮索に、あかりはやや警戒し始める。翔を好きなのだから当然かもしれないが、あかりからしてみれば複雑な気持ちである。

「成程な。で、今の翔はあかりちゃんから見てどんな人？」

「えと、いい人だよ。うん、女子に優しいし」

「なら燕川は？」

「燕川君も、いい人だよ」

「いい人、か……」

口数からして、あかりが自分を用心し始めているのに奈槻は気づく。となると、以降の遠回しでの質問は困難を要するだろう。そう彼女は推測し、心中で一つの区切りをつけた。

「ならさ……」

今まで続いていた会話を一旦打ち切ると、奈槻は窓の外を見つめて一呼吸の小休止。そして再びあかりに向き直る。

「なら、そんだけ長い間一緒におれば、お互いに好きになったりするっっちゃうこととか、あらへんかったの？」

あかりの表情が一瞬固まり、視線が泳ぐ。

「えと、どういう……」

「逆に、向こうから告白とかされへんかったん？」

尚も彼女は畳み掛ける。

「……どうして？」

「やって、不自然やろ。男女が三年間、何も特別な感情抱かないまま過ごしてきた、なんて普通有り得る思う？ ましてや思春期真っ盛りの少年少女やで」

「その……別に」

声のトーンを落として首を横に振るあかり。

「例えば、翔のことはどう思っとるん？」

「えと、だからさっき言ったようにとてもいい人で……」

「んな答えはもう要らん。一人の男としてどう思っとるか聞いとんねん」

追い討ちに追い討ちを重ねるように、奈槻の攻勢はどんどん勢いを増してゆく。

「ん、と……別に、そんな目を見たことないからよく分からない。その、やっぱり假屋崎君は友達として大事に思ってるから……それ以上もそれ以下もない、かな」

「ふーん……」

終始目を合わせない彼女を見遣り、奈槻は得意の意地悪そうな笑みを浮かべる。そして両腕を胸の前で組みながら再び口を開いた。

「そか。ならそろそろ本題に入らせてもらう」

「本題？」

奈槻は目を閉じ、短く深呼吸を済ませる。そして少しずつ瞼を開き、そして、

「翔を振ってくれへんか」

「……………え？」

あかりには目の前の彼女が何を言っているのか全く理解できなかった。

「分からずや……だと？」

翔は顔を俯かせた。それで彼の動きが止まったかと思いきや、ゆっくりとした動作でまた面を上げる。だが、その表情は既に鬼の形相と化していた。

「それは……………お前だああああああああ!!」

「!？」

唐突に凄まじい剣幕で襲いかかってきた翔に、真は応じることもできず押し倒されてしまった。その衝撃で、真の服のボタンが二、三個勢い良く弾け飛ぶ。

「分かってねえのはお前だ！ 何も知らないくせに！ どうしてそこまで疎いんだてめえは！」

「は？ 何のことだ」

「っ！」

翔は真に跨ったまま、シャツを掴む手に更なる握力を込め、先のお返しだと言わんばかりにもう片方の手で彼の頬を強く殴った。

さらに頬に一発。

「ぐっ！」

おまけに腹にもう一発。

「ごほっ！」

「その顔が！ その呆けたクソ面が！ すっげーむかつくんだよっ！」

そして渾身の一撃を彼の顎下にアッパーで喰らわせた。

「ぶはっ!？」

軽度の<sup>のうしんとう</sup>脳震盪を起こし、一瞬、彼の眼球が上を向く。翔と同量の傷を一気に負った真は、あまりの痛みと疲労にただ息を荒げることしかできなかった。

○

「……翔を振って。アイツ、アンタのことが好きみたいやから」

ようやくあかりは言葉の意味を理解した。しかしそれでも尚、あかりは状況が掴めていない。

「あの……どういうこと？ だって假屋崎君は奈槻ちゃんが」

「違う。翔はアンタが好き」

ただ目を丸くするあかり。色々思考を渦巻かせた結果、ああ、やっぱりこれは冗談なのだと自身で押し量る。第一、根拠が不確実なのだ。第三者の証言が存在しているわけでも無いのに、あわてて事実を鵜呑みにする必要は決して無いわけである。

「えと……あはは、そんなまさか。<sup>せっかく</sup>折角二人ともお似合いなのに。一体誰がそんなこと言ってたの？」

「燕川や」

「……………え」

思いがけない返答に少女の笑みが凍りつく。顔だけでなく、身も心も同様に氷の如く凝固した

。

「翔はアンタを中学からずっと好きやったって。でも何も伝えられずに今現在まで引きずるとる、ってアイツはゆとった」

「嘘だって……そんなの」

「燕川がデタラメ言っとると？」

「そんな……でも、そんな」

あかりの言葉に困惑が付き纏い始める。

「……………」

その時、奈槻の勘が一つの違和感を察知した。

動揺の仕方がおかしい。何か、表の言葉とは別のものを気にかけるような、そんな雰囲気。

要因は何だ。奈槻は数分間の彼女の言動を遡ってみる。すると一つの推案が浮上した。

(あかりちゃん……もしかして、アンタ)

「なあ、あかりちゃん」

「……な、なに？」

「『真くん、好き』って、言ってみて」

○

「……俺がずっと苦しんでいたのを余所に、お前はさぞかし気が楽だったろうな」

真は依然として怯んでおり、重ねて翔は責め立て続ける。

「俺は中学から三年間ずっとこの想いと一緒に暮らしてきたんだ……それがどんだ俺を悩ませ続けたか、今のお前には想像もつかねえだろうな。でも、お前自身がいつか気付くんじゃねえかって、内心不安もあったが、同時に実は淡い期待もほんの少しだけ抱いてたんだ。なのに……」

翔の語勢に苛立ちが上乘せされ始める。

「まさか三年経っても気付くことが無かったとはな……ある意味凄えよ、お前は」

「……………」

「残念ながら、俺もそろそろ限界だ」

翔の頬が一瞬緩み、無表情になる。

「無知ということが如何に残酷か、今ここで思い知らせてやるよ」

顔色を陰しく変化させ、今までに無いくらい真を鋭い眼光で睨み付ける。

「いいか良く聞け！」

彼の胸ぐらを一層手元に引き寄せると、今まで溜めていた言葉をありったけに叩き込んだ。

「アイツは、お前のことが好きなんだよ！」

○

「!? い、言えるわけないよそんなこと！ 奈槻ちゃん、今日やっぱりおかしいよ！」

慌てている。取り乱しているのだ。しかしあかりがその事自体に気付く気配はない。

「あはは。ちょっとした冗談や」

「な、何で……ふざけないでよもう……」

あかりからしてみれば、もう笑みを浮かべる余裕すら無いに等しかった。

(ああ一成程成程。一応これではっきりしよったわ)

心の中で奈槻は何度も頷く。

そこで多枝野はある賭けを思いついた。ところが、直ぐ様実行には移せずに言い止まってしまふ。

もし仮に推測が正しいなら、これで三人の関係が自分にとって有利に傾くかもしれない。しかし、逆に違ったとしたら。もし「もう片方」だとしたら、どうなる？ それは、自らを不利に押しやることになるのではないか。事実を露呈させるということは、そういうことなのではないだろうか。

いや、言おう。自分を信じよう。今までの彼女の言動で自らの推測がほぼ確実性を帯びているのは目に見えているのだ。それに、この空気だからこそ訊ける内容であることは確かだ。奈槻は不安を振り払い、自分の直感を信じて決心する。そして目前で座っている彼女に対し、ヒタ、と一歩近づいた。

「なあ。もし、さ」

声に反応してあかりは視線を合わせる。幾度も瞬きを繰り返すその眼が、奈槻には早く落ち着きを取り戻したいと必死に嘆いているようにも見えた。それでもあえて彼女は問う。

「もし、燕川やなくて翔があかりちゃんに告ってきよったとしたら」

「そしたら、あかりちゃんどうする？」

[続く]









# ミュージカル研究会 舞台裏を覗いてみた企画

日芸の公認サークルの中でも、ひときわ歴史のある「ミュー研」ことミュージカル研究会さん。  
なんと、今年で5.9代目だそうです。  
今回エトランゼでは、普段知る機会のない公演の裏側を紹介していきます。

キャストは部内オーディションによって選出されます。  
選考は、稽古でも重要になる「演出」「振り付け」「歌唱」の3つの項目から行われます。  
総合的な力が必要とされる、ということですね。



キャストの稽古はアップからスタート。演劇、歌唱、振り付けの3つのパートリーダーが、それぞれアップの指揮をとります。  
稽古練習、発声練習、ストレッチなどの基本的なものから、セリフの読み上げ、歌やダンスのような発展したのものまで、十分に時間を取って行います。



アップが終わると、今度はパートごとの稽古。キャストはそれぞれ、流れて指導を受けます。

## 演出



演出稽古で行うのは、キャラクターになりきるための演技練習などです。  
なかでも特徴的だったのは、キャストが自身の演じるキャラクターの設定を考えてくる、というもの。しっかりとしたイメージを持つことで、演技指導の方針を定めることが出来るという訳です。

## 振り付け



振り付け稽古では、ミュージカル中のダンスの振り付けを稽古します。ダンスは、一人ずれてしまると全体の構成が崩れてしまうため、統一された指導は振り付けが必要とされます。  
公演で使う曲は全てオリジナル。出来上がった曲にあわせて振り付けも決まります。

## 歌唱



歌唱稽古は、「ミュージカルらしい歌」の練習を行います。ただ歌うだけでなく、「セリフっぽく」「感情をこめて」など、ミュージカルならではの歌唱法を練習していました。

ミュージカルの成功に欠かせないのはやはり裏方。  
ミュー研では、機材の用意や小物などの制作もしています。

## 衣装



キャストの衣装デザインもオリジナル。採用されたデザインを1から制作します。

## 装置



舞台上で使う平巻、バネ巻も制作します。使用機材のチェックや、本番に向けた調整も行います。

## 音響



音響パートでは、どこに効果音を付けるか、どこから曲を流すかを話し合います。キャストの稽古風景も参考に曲を入れる場数を決めます。

取材当日に準備の様子をうかがうことはできませんでしたが、ミュージカルを支えるその他セクションもあります。

## 制作

公演の宣伝等、お客様とかわるセクション。

## 照明

舞台上を照らし、キャストと観客を繋げるセクション。

## 舞台

舞台裏の安全を守るセクション。

撮影：MAO  
取材協力：ミュージカル研究会製作担当



1元デザイン案。本格的ですわ！

キャストの稽古はアップからスタート。演出、歌唱、振り付けの3つのパートリーダーが、それぞれアップの指揮をとります。

滑舌練習、発声練習、ストレッチなどの基本的なものから、セリフの読み上げ、歌やダンスのような発展したものまで、十分に時間を取って行います。

アップが終わると、今度はパートごとの稽古。

キャストはそれぞれ、分かれて指導を受けます。

## 演出

演出稽古で行うのは、キャラクターになりきるための演技練習などです。

なかでも特徴的だったのは、キャストが自身の演じるキャラクターの設定を考えてくる、というもの。しっかりとしたイメージを持つことで、演技指導の方針を定めることが出来るという訳です。

## 振り付け

振り付け稽古では、ミュージカル中のダンスの振り付けを稽古します。ダンスは、一人ずれてしまうと全体の調和が崩れてしまうため、統一された正確な振り付けが要求されます。

公演で使う曲は全てオリジナル。出来上がった曲にあわせて振り付けも決まります。

## 歌唱

歌唱稽古は、“ミュージカルらしい歌”の練習を行います。ただ歌うだけでなく、「セリフっぽく」「感情をこめて」など、ミュージカルならではの歌唱法を練習していました。

## 衣装

キャストの衣装デザインもオリジナル。採用されたデザインを1から制作します。

## 装置

舞台で使う平台、パネルを制作します。使用機材のチェックや、本番に向けた調整も行います。

## 音響

音響パートでは、どこに効果音を付けるか、どこから曲を流すかを話し合います。キャストの稽古風景も参考にして曲を入れる場所を決めます。

## 制作

公演の宣伝等、お客様とかかわるセクション。

## 照明

舞台上を照らし、キャストを輝かせるセクション。

## 舞台

舞台裏の安全を守るセクション。

撮影：MAO

取材協力：ミュージカル研究会制作担当

## 月刊エトランゼ第6刊

<http://p.booklog.jp/book/87422>

著者：kemmy

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kmit-kemmy/profile>

発行：日本大学芸術学部文芸学科 サークルKMIT（ケミット）

URL：<http://kmit.weebly.com/>

小説執筆：霜山モリス/修平/市川正晶

イラスト：めーぷる/Dake/市川正晶

表紙：Dake

巻頭企画：余村和哉（記事）

大久保佳澄（誌面編集）

ときこ（イラスト）

編集：紀谷実伽留/齊藤裕之介/△t（でるたていー）/木村千佳

発行者：松原葵

電子版入力：柚木涼

月刊エトランゼ HP

<http://kmit-monthly.weebly.com/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/87422>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/87422>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ